

全自者協ニュース

- 全自者協ニュース/第10号/1997年(平成9年)7月1日
- 発行所=全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595
- 発行人=石丸晃子 • 編集人=川相智史

試される既存法人

東やまた工房 関水 実

最近、社会福祉法人の立ち上げに参加する機会が多くあります。昨日も、法人化をめざす作業所の勉強会に参加させていただきました。横浜では、運営委員会で運営していた作業所を法人化しようという動きがあわただしく出ています。横浜市の作業所を強化して、障害を問わない地域の一次的な福祉の拠点にするというプランに沿ったものです。背景にあるのは、どこでも聞かれる市政の財政難です。作業所に在宅精神薄弱者デイサービス事業、身体障害者デイサービス事業などを受諾できる法人格を持たせて、国庫を導入するのが強い動機になっています。

このプランのマイナス面は、間口が広すぎることの怖さです。この会報を読む人に、いまさら説明するまでもありません。知的障害、身体障害を問わずに対応することは、言葉としては美しくても実際にできるかという危惧です。自閉症の人への個別的配慮の欠如など、今までも指摘されてきた援助の質が今回のプランで、改善される担保がなされているようには全く思えません。むしろ、障害の多様化、対象者数の増加に援助技術が追いつかないことが目に見えています。

皮肉なことにプラス面は、行政がそれを意識しているとは全く思えないことです。抽象的なもの言いですが、作業所が法人化のプロセスで、既存の社会福祉法人や親が作った施設とは違ったものを作りだそうとしているということです。

それはかなり意識的に取り組まれているように思えます。横浜の地域作業所は、既存施設を反面教師にしつつ運動してきた面もっています。例えば、強い地域での生活を指向、保護者の活動への日常的な参加、猝にとらわれないニードへの対応、運営委員会への本人参加、幼児期や学童期の障害団体の積極的な参加、町内会など地域団体との密接な関係、など言葉だけでない地域に根付いた活動をしている作業所があります。

その積極面を自覚した人たちの場では、例えば、施設を作るときの「親のエゴ」ということが、法人設立の学習会の中で、親と関係者の間でどうどうと語り合っています。そのなかではエゴを否定するのではなく、自分の子のことを全体の中でどう調整していくかの論議が全体の合意の中で行われていたりします。地域の多様な関わりの中での主体的な活動が産んだ感性が、例えば私たち親の会を設立母胎とした法人のもちやすい単一的な価値観や多くの既存施設の施設内の利用者だけを優先しやすい閉鎖性を超えているのを実感します。

もちろん、具体的な法人化とその運営の中で、その美点がある意味で変質せざるを得ないのが今の施設の措置体型だと冷ややかに言い切れることは簡単ですが、われわれ既存法人の当事者が学ぶ点は多いと感じています。

第10回大会・名古屋

第10回全国自閉症者施設協議会大会が平成八年十月二四日から二日間(二日)にわたり、全国から85施設(公員施設33、非公員施設52)、二四四名の参加者を集め、愛知県名古屋市の名古屋クラウンホテルで開催されました。

開会式では、社会福祉法人昭徳会の鈴木宗首理事長から歓迎の挨拶・全自者協石丸晃子会長の主催者挨拶に続き、愛知県民生部長・名古屋市民生局長・三好町長・日本自閉症協会副会長と多くの方々

の祝辞が述べられました。開会式終了後、厚生省大臣官房障害保健福祉部障害福祉課長林民夫氏から障害者福祉行政の最近の動向および今後の障害者福祉行政について詳しく行政報告がなされました。その後、林氏からの報告を受け、全自者協副会長石井哲夫氏から中央情勢報告がなされました。石井氏はこの中で、今後の全自者協のあり方・強度行動障害対策と自閉症児者への社会的理解・処遇実践の推進と普及について言及がなされました。

その後、四分科会に分かれ、発表と討議が熱心に行われました。

第一分科会では「自閉症者施設の運営について」のテーマで、太陽の村・ひらきの里・あさけ学園から施設開所当初の理念と現実とのギャップの大きさについて保護者の立場から意見交換がなされました。まとめとして、ノーマライゼーション理念を実際の障害者処

遇の中で具体化していくことの重要性が指摘され強調されました。第二分科会では「自閉症者の暮らしの豊かさについて」というテーマで、特に処遇困難な自閉症者への生活援助という視点で泰山寮と星が丘寮から発表がなされました。施設の枠の中に個人の生活というものを作り出し、その中で豊かさを感じてもらえるよう援助し

ていくことの必要性が強調されました。また、豊かさを感じるのは個々人であり、その実感をどのように知り、判断すれば良いのかという問題提起があわせてなされました。

第三分科会では「自閉症者の作業について」というテーマで志摩学園と初雁の家から発表がなされました。労働の持つ二つの側面、自己実現・自己表現という側面と社会参加・社会的労働という側面は、施設の中では片方の面だけが強調されやすいが、自己実現と社会的労働というのは分離して考えるものではないということが強調され、施設内作業も社会的労働との関連の中で位置付けられなければならないと提起されました。

第四分科会では「行動障害への対応について」をテーマにあさけ学園と川崎市くさぶえの家から発表がなされました。強度行動障害を持つ利用者に対する援助は、本人の行動障害の要因を的確に捉え、明確なゴールの設定と継続・統一した対応が必要であることを一つの事例をとおして再確認されました。

分科会終了後は懇親会が開かれ、全国各地からの参加者の交流が深

められました。

二日目は、全自者協会会長石丸晃子氏と奥野宏二氏から総会報告がなされ、今後の全国自閉症者施設協議会大会の方向性と全自者協のあり方についての方針が発表された後、平成9年度の大会の主管施設をとえ学園にすることが承認されました。引き続き、愛知県は大学人間科学部教授森省二氏による「治療教育の作戦と実践をめぐって―成人自閉症者施設における嘱託医としての経験から―」と題した記念講演が行われました。

先生は長年の臨床と泰山寮での嘱託医としての経験をふまえ、治療教育を行う上での留意点・ポイントについて詳しく説明をしていただきました。施設内で日々の療育に追われがちな参加者にとって自閉症者を見つめなおす有益な機会を持つことができました。

閉会式の後、今大会の主管施設である泰山寮の施設見学が行われ二日間にわたった研究大会が無事終了しました。

会員施設を中心に全国からの参加者による熱心な討論がなされ、充実した研修・交流の成果をあげることができました。

(泰山寮 柴田弘二)



の作戦と実践を

総会報告

全国自閉症者施設協議会第9回総会が、5月14日午後3時より東京飯田橋のシニアワーク東京で開催された。

議長に大分・めぶき園園長の五十嵐氏が選出され、議事が進められた。平成8年度事業報告、決算報告に続き、平成9年度事業計画、平成9年度予算が審議、原案どおり可決された。

9年度事業計画のなかの行政機関及び諸団体との連携に関連して、日本自閉症協会への団体会員としての入会が石丸会長より提案され、審議可決された。日本自閉症協会とのさらなる連携が期待される。第11回大会の開催について、今年度主幹施設、広島・ともえ学園から大会の簡素化への提案と内容の説明があり、討議がなされた。第11回大会は、10月24日、広島県三次市で開催される。次期主幹施設は兵庫・あかりの家が担当することとなった。

三菱財団助成の「自閉症に関する施設職員の研修方法の研究および具体的試み」の事業完了報告が(社福)嬉泉の奥村氏よりなされ

た。「自閉症への理解」「自閉症への援助」「コミュニケーションと社会参加」の3巻よりなる新人研修用ビデオと副読本が完成し、全自者協加盟施設に配付された。

また、調査研究委員会のあさけ学園・近藤氏から委員会の経過と今後についての報告があり、昨年度から継続されている「自閉症成人施設の労働(作業)への取り組みに関する調査」の内容説明と今年度実施への依頼がなされた。6月末の調査票回収、その後、集計処理され、大会での報告を経て、9年度中に報告書にまとめられる予定。

休憩をはさみ、後半は6時より各施設からの情報交換と今後の協議会のあり方について活発な意見交換がなされた。自閉症者の処遇の困難、運営管理の窮状の中、自閉症者施設としての積極的な意見が多数出された。石井副会長からも、自閉症者施設における行動障害への対応援助の重要性と、強度行動障害特別処遇事業の意義が強調され、意見交換のなかでも、今後の自閉症者施設の在り方として、強度行動障害に対する援助と地域療育の機能を強化する必要性等が話し合われた。(川相 智史)

ダン・アッシャー

ダン・アッシャーさんの彫刻、ドローイング、写真、ビデオによる個展が去る4月8日から26日、東京で開催されました。

アッシャーさんは、「自閉症だった私へ」の著者であるドナ・ウィリアムスとも交流のある自閉性の障害を持った方で、来日時にも積極的に自閉症関係の人達に会ったそうです。

彼からは次のようなメッセージがありました。

「来日してたくさんの方の自閉症に関係した人達に会いました。

私たちは専門的援助を求めていますし、私たちに共感してくれる人々を求めています。」

彼らは私たちに自信と勇気を与え、一般からは異文化である私たちの世界を認めてくれます。それが来日した大きな目的でもありました。

私たちが疎外された存在でないことを確かめたかったです。

まもなくアメリカに帰りますが、また日本に戻ってきて、自閉症の人達が情報交換でき、交流を深め、援助を得ることができるような場を作りたいと希望しています。

そこでは様々な芸術活動を通じ、自閉症を援助し、勇気づける場としたいのです。

自閉症にとっては、一人の人間として人々から認められ、尊重されることになにより大切です。

そういった世界を作っていくたいと思います。」



ダン・アッシャー ●1947年、オハイオ州クリーブランド生まれ。文化人類学を学んだ後、写真家として活動。1980年頃から絵画、ドローイング、彫刻、ビデオを制作。ヨーロッパ各地で個展。今回が日本で初めての個展。

対談 中澤 健／石井哲夫

今回の対談者は元厚生省児童家庭障害福祉専門官の中澤健氏です。中澤氏は、秩父学園ではやくから自閉症児の療育に携われ、また現在は、マレーシアで障害者への地域福祉援助を実践されております。幅広い視点から障害者福祉の在り方を伺いました。

石井「自閉症の人は、一般に知的障害の人と比べて人間関係を非常に問題だというか、人間関係を調べる力が弱い、あるいは人間関係の中で適切な行動をすることが少ないといわれるわけで、事実そういうことを感じるわけです。」

しかし、自閉症者も知的障害―精神薄弱者―の範疇に含めて、その知的障害というものを主障害とみて、自閉症障害というものをあくまでもそれの中の一系列であるという考え方でその援助制度を作ってきていると思います。精神薄弱者更生施設では、身辺自立、職業訓練ということで社会参加を進めていくという更生という機能を重視するわけですが、自閉症の場合、なかなか更生、社会参加が難しいわけです。それは人間関係が大変希薄だということで、当然ながらそういう意味の活動をするには、一方において社会活動などの啓蒙活動をしていきながら、利用者本

人は試行的に社会参加をしていながら理解者をつのり、またそれをジョブコーチなりガイドヘルプしながら援助していくという様々な機能を施設は持たなければならぬわけですが、生活におわれ、また生活の中でも行動障害を起こしているというのが実情です。そういう事をどう考えていったらいいのか、まず、お話していただければと思います。

自閉症と施設体系

中澤「難しい問題ですが、「自閉症児施設」というものがあって、「自閉症者施設」というものが施設体系の中になんかということ、障害児者施設という施設体系を作ってきた流れからすると不自然です。知的障害と自閉症という障害は別の障害ですから、障害の特徴をみると、非常に典型的な障害の部分ではやや反対の性格を持っているといってもいいようなところ

があります。例えば知的障害の人のおだやかな人懐っこさみたいなところ、人間関係をスムーズにきずいていくことの難しい自閉症障害とはいわば対局にあるとも言えます。ですから、障害種別ごとに施設体系を作りあげていくという過程の中で「自閉症者施設」というものが出来なかったということは、施設体系として不完全だといえると思います。それはおそらく、障害の理解・認識に問題があった結果であろうと思います。

ただ、私が障害福祉専門官をしていました時、本当に障害種別にどこまでも施設種別の施設を作りつけて、新しい障害と言われれば、そういう人達の施設をつくるという行き方が本当に良いのだろうかとか考えました。むしろ細分化した施設体系ではなくて、やや統合的というか、制度上の施設種別としては統合的な、いわばボーダレスの、しかし、処遇上は個々の障害の状態に見合った専門性が発揮できる予算措置の仕組みができれば、その方が良いのではないかと感じていました。そういう施設体系に関する研究も心身障害研究の中でずっとやりながらも、結局本望に望ましいものは何なのかという納

得のいく結論は得られないまま来てしまったような気がしております。

発生率の問題

石井「行政施策の進展の中で自閉症の実態がつかみにくいということがよくいわれます。学者の意見もまちまちだし、相談所等で判定をする場合にその判定の仕方が客観的にできていないということがいわれます。それから教的にも知的障害が圧倒的に多くて、自閉症は少ないといっていたわけですが、その後の研究などみてみますと、発生率は非常に高くなっています。東大の清水さんが横浜を対象とした実態調査では、5歳未満では一万人に16人という数値、それから5歳児の場合には一万人に21人という数値がでています。かつては一万人に3、4人ということをしていわれていたわけですから、かなりの人が潜在していたことになるわけです。

自閉症と知的障害

また、自閉症の理解のされ方ですが、ある重複障害の研究の中では、自閉症を知的障害を主症状とした非社会的な傾向をもったもの

として捉えられていました。われわれは、自閉症を主症状として、そこに知的障害がともなうという逆の見方をしてきました。精神薄弱児者対策の中に、自閉症施策も含まれている現在、この視点にたった療育とか、福祉援助を考えてもらいたいと思います。

また、認知障害説が現れて、自閉症イコール認知障害といわれ、認知を良くするための教育をすれば自閉症は良くなるというような考え方が教育の分野からでてきました。これは能力主義に基づく指導、教育です。統合教育が、形の上では平等であり、権利を保障しているかに見えて、実は自閉症児者本人は理解もされず、特別な援助もされないまま放置されてきたわけです。ある人達は追い詰められ、ますます行動障害を強めていったという経緯があります。そういった強制的な教育観というのが、施設の中にも残っていると思います。

先生は秩父学園にも長くいらっしゃって、自閉症ともかなり早い時期から、直に接しられたと思うのですが、いかがですか。

自閉症児との出会い

中澤―私は実際に現場でやってた期間はそう長くなかったのですが、当時の知的障害の人達への保護と指導というような考え方で通常のカリキュラムに沿っては捉えきれない子供たち、実際、指導していくにしても相当に無理をして、あれこれ工夫しても難しいというような子どもたちが、ある時期入ってきました。確か昭和四〇年代の後半だと思います。国立コロニーができた後に何人かそういう子どもたちが入ってきました。しかし、そういう子ども達の処遇ができないとしたら秩父学園は何のためにあるのかというようなこと



中澤 健氏

を考え、職員と親を巻き込み、研究グループを作りました。いったいどうしたらいいだろうか、とにかく観察をしようとかいろいろやってみました。しかし、それで目立った成果があったというわけでもないです。その当時、私は、その子が知的障害なのか自閉症なのかというようなことを考えたわけではなく、その子のとる対人接触障害というか、どうにも取りつく島もない状態に対し、とにかくなんとかしなければならぬとあせりを感じていたわけです。その当時、石井先生のところへ伺ったり、研究会にも確か出していたのだと思います。現場的な感覚の中で、その頃思ったことは、理論だとか説明よりもいったいどうすればこの子との良い関係が結べるだろうかといったところが切実だったわけです。しかし、その当時、知的障害者関係の人達は、親の会が中心に活発な活動に進んでいたわけですが、これは間違っているかもしれない、これは間違っているかもしれない、私の印象では、専門家といわれる人が少なく、その少ない専門家といわれる人達が、や基本の障害認識というか、あるいは対応への考えが違って、知的

障害の関係者が合同していったような形では自閉症の場合は進まなかったように思っています。

知的障害関係者のこと

石井―今、ご指摘の通り、自閉症については、カナートとアスペルガーの違いもあるし、日本では、牧田・平井論争といったものもあり、また精神科領域の人達、小児科領域の人達、心理学の人達がそれぞれが独自でやってたわけです。そういう中でおっしゃるように、知的障害の方は、三木先生が中心になり、杉田さん、山口さん、あるいは山本さんといった人達をまとめていって、心理学として、身体運動感覚的な領域の理解とか、人間を全体的に見ていく、あるいは捕捉的にとらえていくような捉え方が、かなり現場の教員を引きつけたし、親を育成会という運動として非常に調和のとれたものにもっていったと思えます。そういう意味で三木先生は力量のあった人だと思えます。

受容の原理

ただ残念ながら、それは本質をついていなかった。つまり人間というものについての理解が不足し

ていたと思っています。われわれが反省したのは、こちらが思うような形、例えば農民に育てる、大工に育てるといった勝手なイメージを人間につけてしまったことです。まさしくそれは、知的障害のみが、知的障害においてはそのみしか許されないような人間的な偏見というものを広げてしまいました。それも非常に優しい言葉で広げたことが問題があるところだと思います。このことは徹底的にその本人の立場というものに戻って、人間が生まれ、成長し、社会を体験していく過程の中で、どのような事を学び、どのような道を選んでいくかというところが大切だと思います。それは受容の原理であり、カウンセリングの原理になるわけです。ただカウンセリングが誤解されるのは、あなたの気のすむままにどうぞ自由に暮らして下さいというふうなカウンセリングではなく、そこには当然ながら、あなたはそういうふうに進んでいくけれども、私はそれに對してこう思うよ、という他人がいてその関係、交流の中で確実に自分の道が明らかになっていくことが重要です。そういう意味で、私は受容だけではなく、交流の重要性を認識

し、受容的交流という概念を積極的に出したわけです。多くの人から分らない、分かりにくいということをよく言われましたが、全体の自閉症を巡る状況だけではなく、普通の学校教育においてもカウンセリングの重要性とか、それから福祉における相談援助の重要性というものは時世の潮流として動いてきたわけです。それから知的障害においても、本人発言とか社会参加といわれるようになってきたということは人間観が変わってきたということだと思います。自閉症の援助がたちおくれたのは、やはり自閉症が関係ができていくために取り残されたのだと思います。自



石井 哲夫氏

閉症理解については徐々に分かってきたのですが、まだ制度的にも不十分です。そこで伺いたいのは、制度的には、また限られた資源を有効に使うためには、障害種別、専門別の援助機関があったほうが良いというのではなく、統合した中にそれぞれの専門性が確立するのが、私は理想だと思いますが、統合してしまうと安易な方に、あるいは多数の方に偏りができてしまう。昨年、厚生省が3障害をひとつの部に統合しましたが、どのようにお考えですか。

厚生省障害関係部署の統合

中澤—正直なところ、私はとても不安に感じています。厚生省の障害関係の部署はみんなまとめてひとつになれば態勢が強化され、一貫した対策がとれるように感じますが、果たしてそうでしょうか。利点もあることは確かですが、留意すべき点への配慮がきちんとされないで大変大きな問題が生ずると思います。

いま先生がおっしゃられた統合ということをどう考えるかということだと思います。ただみんな一緒であれば良いというのは、統合というより混在というべきでしょう。

う。それではノーマライゼーションに反すると思います。混在は、多数派が有利だからです。ノーマライゼーションというのは、少数派が伸び伸び生きられるために社会の諸条件を整備して、整備することと相まって、本人自身が地域社会で暮らすことを願って実現していくものです。障害に対する理解もない、相応しい専門性もない、すなわち、まだ条件整備も出来ていないのに「参加と平等」の掛け声だけのノーマライゼーションでは、犠牲を被るのは障害者本人だと思います。障害のない人の側が思えば、そういう乱暴なこともできてしまうところに問題があります。どういう形で障害の理解のための考え方の浸透のための努力をし、相応しい専門家を配置し、社会全体の条件整備をして、ノーマライゼーションといわなくて良い社会作りをしていくかだと思います。そこに向かって行く準備や努力を抜きにして、掛け声だけ、形だけというのは危険です。その意味で障害関係部署の統合は私にはやや危険に感じられます。しかし、別の見方をすれば、従来の考え方にとわられずに新しい課題認識に立って、輪を広げて行政に強く訴

えかけていくチャンスとも言えるのではないでしょう。

個に着目した援助

障害施設についていえば、障害種別というよりは、個に着目することが大切ではないでしょうか。先生がおっしゃるように、統合的なところで障害者施設というか、あるいはスペシャルニーズを持つ人たちのための福祉的対応というものを考え、一人一人に見合った必要に応じた専門的対応が可能な仕組みを作ってゆくということではないでしょうか。個に着目した予算措置が取れる仕組みをどう作りあげることが課題だと思います。それから先生が受容的交流とおっしゃいましたが、この頃のことの重要性がとて良く分るようになりました。私の場合のように外国で言語・習慣等の違う少数派として暮らしていると、正面から向き合い、お互いに流れ合うもの大切さを感じます。違った人間が、お互いを知り、認め、また時に待つことがとても大切だと思います。私は周囲の人に排斥されたら外国の地で暮らせないわけで、また一方、マレーシアの福祉事業などについての議論をしていて、

日本の経験をもとに、こうすべきだとかこの方が良いとか結論的には言いたくなる時があります。

その方がその場では簡単ですが、それでは結局無理にさせるようなことになり、どこかで優越し、相手を傷つけることになってしまっていると思います。少し違った側面からかもしませんが、受容的交流というこの意味を切実に感じています。

ボーダレス

石井―私自身もやはり性急に、我々側のいろんなことを分ってもらうことが社会参加への早道だと思ってしまうこともあります。なんとかが分らせようという気持ちででききます。ノーマライゼーションということもいろいろ思いで理解してしまう傾向があります。普通というのは標準とか、規格という意味でとらえて、それがノーマルであってノルムだととらえる人が以外と多いのです。それが例えば健康な人、普通の人ややっていることを障害者にも経験させることだと思ひ、スポーツ大会なんかすればいいというわけです。あれだけの記録を出して、立派な成績を上げるような人が出てきたと

いうことは素晴らしいことで、それを否定するわけではないのですが、障害者はいっばいいるわけです。それだけでは救えない。本人発言でも、その一部の人が喋ったということによって世の中がよくなったと言えないわけです。ボーダレスということの大事なところは、それぞれの立場があって、それを認めることがボーダレスなんだということなんです。それから、社会福祉施設の意義は、結局はそのままでは社会で生活できない、そのままでは虐げられてしまう人を保護するということと同時に、その人に通用する考え方や、その人を援助する方法を学びとることがあると思ひますが、最後に、社会福祉施設、特に自閉症者施設に関係している職員に一言お願いします。

個の尊重と予算措置

中澤―私にはどこか施設の限界みたいなものを感じているところがあります。それは何かというと、やはり施設というのはどうしても集団で捉えらるえ方を基本的にしがちなところがあるからです。現実の人間というものは共通項が沢山あるわけですから、集団で捉

られる部分がないとはいえませんが、肝心なところでは、やはり個別的なところを大事にしなければなりません。ですからそういう意味で、従来型の施設の集団的な発想ではない、個に着目したような見方で、どう一人一人と正面から向き合っていくかが大切です。

しかし、そういうふうなことがしたくても、今の人員配置では様々な問題がでてくるような気がしますが、最初の話に戻りますが、自閉症者施設を新しい施設体系に加えるとか、それが可能な施設制度を作るとかではなく、むしろそういう個別的な対応が可能なような配置の出来る予算措置を訴えていくしかない、私は思っています。また、そういった予算措置がないうちには出来ないというのではなく、考え方としては個別的に、正面から向き合って利用者を理解するというのが、利用者側から強く求められてくるように思ひます。

さつき学園

静岡県の自閉症の子を持つ親たちの、わが子だけでなく多くの自閉症のためにとおこなった14年間の努力が実り、社会福祉法人ふじの郷、自閉症者成人施設さつき学園が開設されました。

建物は、精神的に支えてくれている神山復生病院の森にあり、その土地の歴史を残す南欧のカテドラル風建物で、ステンドグラスが美しい自然を映しています。

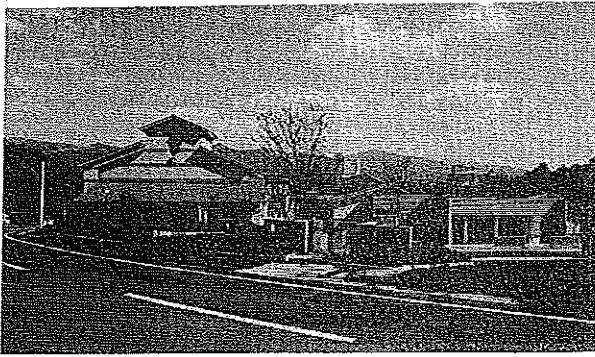
オープン後、半年が過ぎ、今、私たちは、得難い貴重な経験をしているところです。

村松理事長の強い願いから、住人のために、一気に定員一杯にせず、体験入居をおこない徐々に入居を行っています。また、入居後も住人と家族、地域とのつながりを保つために毎週全員週末帰宅を幸い関係者の理解を得て行っています。親たちは園に理解があり、協力的で、園は親に支えられ、住人は、重い、軽いに問わず大変落ち着いています。

「園に入れたら終りでなく、これから新しい暮らしが始まる」と

いう親の意に感謝しています。受容的交流療法が援助の基調になり、囑託医の小林隆児氏には適切なアドバイスをいただき、さらに何よりも職員に受容的な姿勢、愛情と熱意とセンスがあり、和を重んじ、全員一丸となって富士と箱根に囲まれた緑の地で、人との愛と交流の拠点を作っていきたいと思います。

(さつき学園 金沢信一)



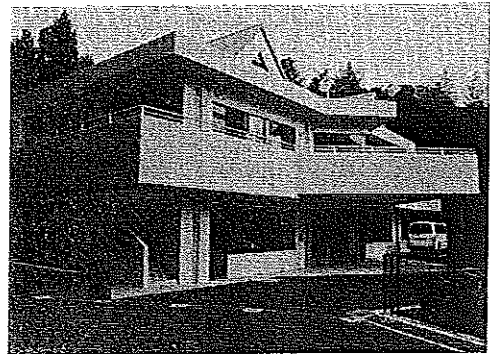
わたげ

わたげは、ペリーで有名な浦賀港の西、横須賀市西浦賀町に九六年十一月に開所しました。「海」を連想されるかもしれませんが、「緑豊かな」という形容詞が似合う場所に建っています。神奈川県内では、自閉症の人への援助を行う通所の専門施設としては三番目となります。

横須賀地区自閉症児・者親の会(たんぼの会)が、設立母体です。施設名の「わたげ」は親の会の名称に関連したものです。現在、二十三名(定員三〇名)の自閉症の方にご利用いただいています。

わたげでは、「障害をもつ人が、障害を抱えたままで、地域社会の中で当たり前の生活を営む。その営みの上で必要としていること」という視点で援助を行っていきたいと考えています。

一人ひとりに個性があるように、抱えている障害像も違います。また生活のスタイルも各家庭で違うのですから、個々のニーズや課題も違いがあって当然です。私たち



はこの違いに応じた配慮と援助の実施を目指しています。

また、これまで社会参加という「参加できる人が参加する」という考え方が主流だったと思いますが、私たちは、「参加するため工夫をして参加する」という視点で個々に適した形態や方法を柔軟に考えながら必要な援助と場面の提供を行っていきたいと考えています。開所して半年、日中の活動は施設内が中心となっているのが現状です。

言うは安し、されど行は……。
(わたげ 小林信篤)